

# クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

京都コリアン生活センターエルファ  
ナンスヒョン  
南珣賢

## すべての人たちの「ありのまま」を目指して

### ■ NPO法人京都コリアン生活センター ■ エルファとは

NPO法人京都コリアン生活センターエルファは1999年、居宅サービス事業所として京都市南区に設立されました。2001年にはNPO法人認証を受け、在日コリアンをはじめ、外国籍や異文化を背景に持つ高齢者のための介護事業を中心に障がい者支援、子育て支援、多文化共生実現のための活動を行っています。

2000年4月に施行された介護保険法には国籍条項がありません。日本人だけでなく外国籍住民も介護保険利用者となりました。14年前の施行当初、利用対象となる外国人高齢者はコリアンが最も

多くそのほとんどが1世でした。しかし一方で在日コリアン高齢者が保険料は徴収されるが介護保険サービスをスムーズに受けられないという状況が生まれました。

在日コリアンは「国籍条項」により長きにわたって社会保障制度の外で生きてきました。国民年金をみても、外国人が加入できるようになった時点で経過措置が実施されなかったことから、介護保険施行当時74歳以上のコリアン高齢者は日本人なら受給可能な「老齢福祉年金」を受給できない「無年金」世



毎年6月15日はエルファまつりの日。「在日コリアンの問題は日本人の問題」として捉え日本人としてエルファを応援しようと始まった「エルファ友の会」(代表一清水寺森清範貴主)が主催します。4か所のデイサービス利用者と共同作業所のメンバーさんがあるがままの姿で歌って踊ります。

代だったのです。介護保険を利用する上でコリアン高齢者が抱えていた主な問題点は福祉サービスだけでなく制度に対して無関心であること、日本人ではない者は制度を利用できないという認識を持っていたこと、就学経験がなく読み書きができないことにより情報が行き届かない、そして日本人高齢者とは言語、文化的背景、生活歴が異なるという点でした。

### ■ 歴史が残した心のバリア

ある日、ケースワーカーから依頼を受け、印鑑のトラブルで介護サービスを受けられなくなったという独居のハラボジ(おじいちゃん)宅を訪ねました。朝鮮語で話を聞いてみると「(植民地時代)ハンコのせいで日本に連れてこられ炭鉱を渡り歩いた。わしの親もハンコのせいで土地を奪われた。家族とも生き別れ、わしの人生をメチャメチャにしたハンコなんや。弁当もらうくらいでなぜハンコというのか!」と抗議をしていたのです。そこで私たちが朝鮮語で介護保険のしくみを説明すると安心され、その後はサービスを受けてもらえるようになりました。ある施設ではほかの利用者たちが唱歌を歌うと怒り出すハルモニ(おばあちゃん)、習字や俳句が始まると職員の促しを無視して立ち去るハラボジ、朝鮮語なまりの日本語を使うとばかにされるからと、一言も発せず「失語症」として対応されていたケースなど…誰でも読み書きができ、唱歌が歌えると思いついでいる施設職員さんは「できない」、「知らない」という発想になかなかとどきません。歴史が残した心のバリアがそのような行動に及んでいることに気づけず、施設の「クレーマー」として

扱われてしまうケースも多くありました。

介護保険制度が外国籍住民も含めた制度として成立する以上、外国籍や異文化を背景に持つ高齢者の言語的・文化的背景に配慮し、彼らも日本人高齢者と同質のサービスを受給できることが必要です。そのためには要介護認定の際、必要であれば母語での通訳を行うスタッフがおり、多文化を意識した、「心のバリア」に目を向けることのできる事業所や介護職員などが求められます。認知症の高齢者の中には後天的に習得した日本語を忘れ生まれ育った故郷での生活が蘇り、今を理解しにくくなるケースがあります。

## エルファの取り組み

エルファでは日本語を忘れてもコミュニケーションに困らないよう職員はバイリンガルで、在日コリアンのルーツや現状に寄り添ったケアを提供しています。デイサービスでは学校への憧れが強い1世の思いを考慮し学校の要素を多く取り入れ、同時に朝鮮食材作りなど、これまでの生活歴を尊重したレクリエーションをプログラムしています。中でも一番のレクリエーションは来訪者との交流です。エルファには学生から各種団体まで日本各地や海外から年間1,000人ほどの方々と交流があります。「なーんも知らん私らに会いに来てくれてありがとう！」来訪者を笑顔で迎えるハラボジ、ハルモニたち。来訪者たちは1世の言葉と屈託のない笑顔の裏に隠れた深い悲しみと痛みを心で受け止め、触れ合わずして持っていた先入観や固定観念を払拭して帰っていきます。迎えるハラボジ、ハルモニたちは会いに来てくれる人がいることに戸惑いながらも、まだ自分が必要とされる存在なのだという喜びを生きる意欲につなげてくれます。

エルファではバイリンガルのヘルパーを121人養成し、その中からたくさんの介護福祉士やケアマネジャーも誕生しました。現在、居宅介護支援事業



エルファの各デイサービスにはたくさんの生徒たちが研修で訪れます。お年寄りとあまり触れ合ったことのない子どもたちがここでは普段と違う表情を見せてくれます。

所、訪問介護事業所、4か所のデイサービスを有し、1か月あたり160人あまりのコリアン高齢者のケアに69人の職員が携わっています。

## 嬉しい、楽しい気持ちに満ちた「エルファ」の場所に

言葉の通じる介護職員や看護師がいて、故郷の友がいる、食べ慣れたキムチや朝鮮料理を食べ、懐かしい歌を口ずさめる場所—エルファ。エ



夏まつりは輪投げで一層盛り上がります。利用者はもちろん職員も夢中になって共に楽しめます。

ルファとは嬉しい、楽しい気持ちを高める感嘆詞です。言葉にならない苦しみと痛みを負った在日コリアン高齢者の「アイゴー（哀しみの感嘆詞）」の人生を笑顔と喜びに満ちた「エルファ」に変えたいという思いで活動してきました。

エルファでの経験を基に全国各地のコリアン集住地域に介護事業所が誕生しました。

そして今では中国残留邦人（帰国者）1世のための介護協力へと活動は広がっています。帰国者は、国籍は「日本」だけれど生活文化は「中国」にあります。日本で生活する上で抱えている問題は数年前の在日コリアンと重なります。東海地方では日系ブラジル人の高齢化が地域の課題として上がってきました。ある資料によると今では「30人にひとりが親のどちらかが外国人という時代」とありました。日本に居住する人々の背景が国籍だけでは測れず複雑化しています。

日本と自国などの生活文化に精通した中国帰国者2・3世や在日外国人が積極的に資格を取得し、地域の施設に勤務するようになればマイノリティがきっと明るい老後を過ごせるはずです。エルファにはそのためのヒントがたくさんつまっています。

日本に住むマイノリティがありのままの姿で過ごせるように、そしてエルファに集うすべての人の真の「エルファ」と多文化共生社会実現のために、今後もエルファならではの活動を推し進めていきたいと思ひます。